

行われた可能性が考えられる。

小 結

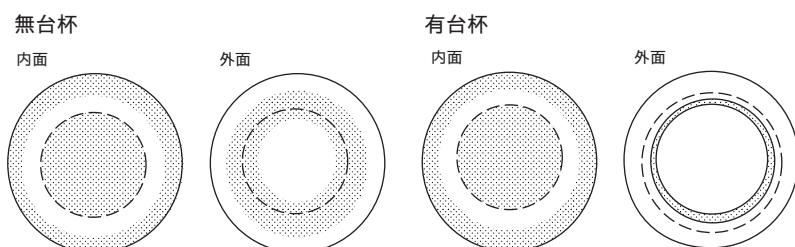
以上のように新津丘陵（周辺）では加賀や越中と比較し量産を強く意識しない品質重視の土器生産体制が後の時期（V～VI期）まで維持された可能性が高い。このような生産体制が維持された背景については多様な要因が考えられ、充分検討できていないが、その一因として土器の使用法と関連する可能性が考えられる。吉岡康暢は古代末～中世の土器組成や土器量を比較し、東北地方と畿内周辺を、「西日本の複合的消耗品示向、東日本の单一的耐久品示向といった物質文化に対する価値観の差異が伏在したとする解釈が生まれる余地があろう。」と評価した〔吉岡 1991〕。このような傾向が古代にも存在した可能性が考えられ、越後は東日本と、加賀は西日本に近似した様相であった可能性が高く、土器に対する価値観の違いが土器生産に影響を与えている可能性もある。

C 須恵器食膳具の使用痕跡

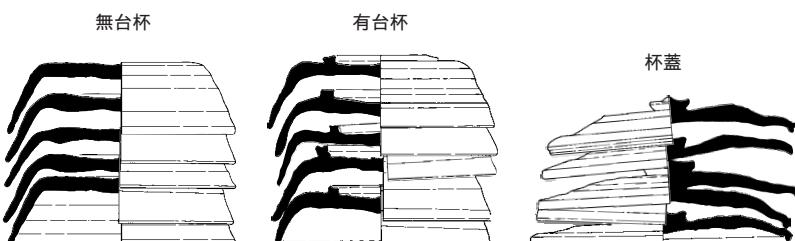
無台杯 ①口縁部内面、
②体部下半から底部外縁付近、③見込みが磨耗するものが多数確認できた。
①と②は重ねて収納した時の対応する磨耗痕と考えられる（第28図）。③は収納時以外に生じた痕跡の可能性が高く、食事時やその後の洗浄時に生じた可能性も考えられる。

杯蓋・有台杯 有台杯は①口縁部内面、②体部下半、③見込みに磨耗がみられ、また④高台には磨耗・欠けがみられる。①・②から無台杯と同様の収納方法が推測できる。また③も無台杯と同様に食事時やら洗浄時に生じた可能性が高く、④は食事時・収納時両方で生じるものと思われる。

杯蓋は、①内面、②摘み先端部に磨耗が確認できた。また③口縁端部には磨耗・カケが確認できるものもある。①～③から直接重ねる収納方法が推測でき、有台杯とは別にまとめて収納されていた可能性が高い。なお②は範囲が広く、磨耗も強いものが認められることから、全てが収納時に生じたとは考えにくく、倒位にして食器として使用した場合もあったと考えられる。



第28図 磨耗部位（アミが磨耗部位）



第29図 杯類の収納方法

3 西川流域の古代土器様相との比較

新津丘陵周辺と西川流域は、ともに律令制下の蒲原郡に属したが、古墳時代前期にはそれぞれ異なった政治勢力が存在し、新津丘陵周辺は長岡市東部の東山丘陵周辺と、西川・矢川周辺は島崎川流域の地域と

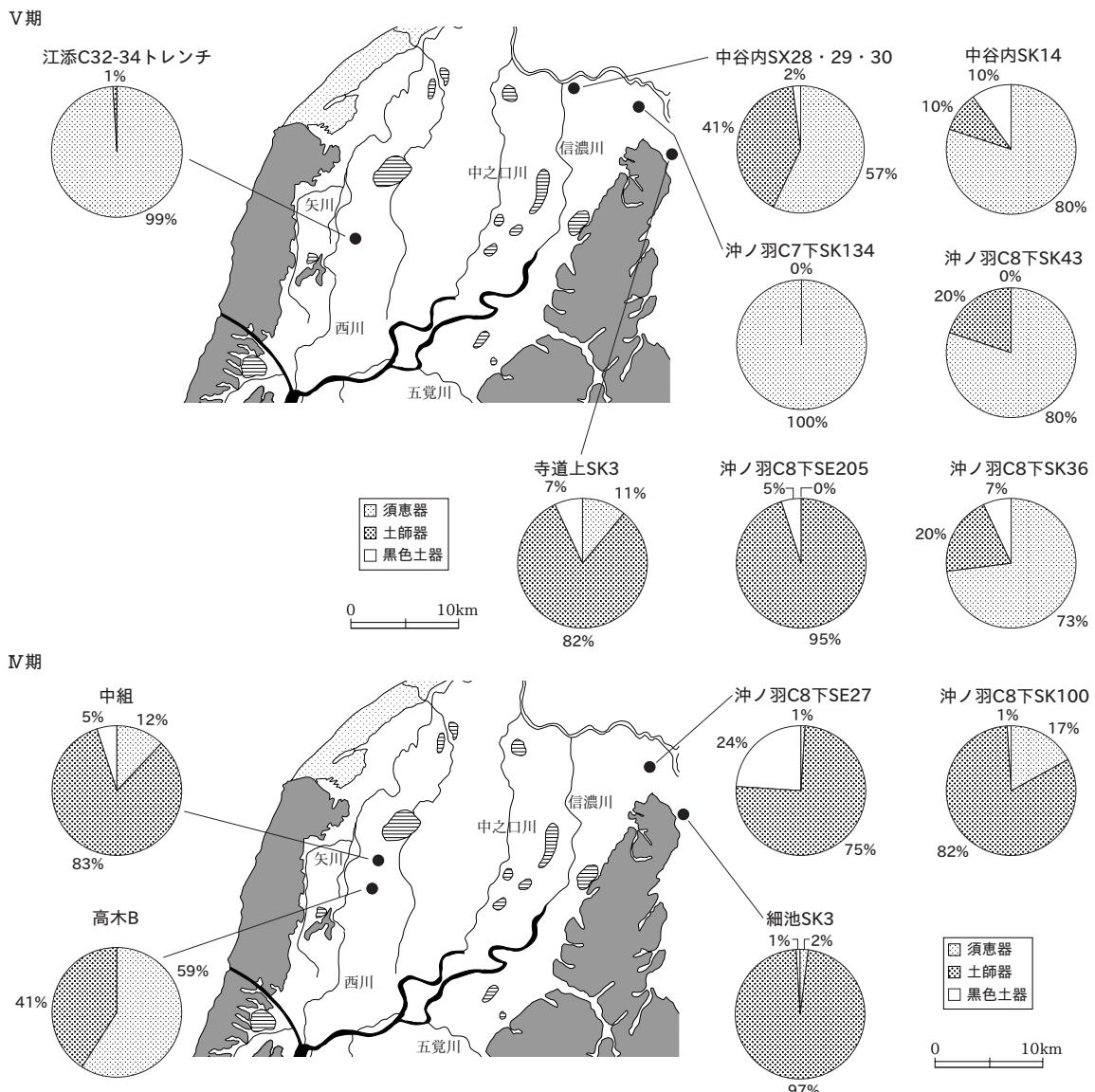
それぞれ関連が強いことを第II章2-Bで指摘した。西川流域の土器様相についてはかつて触れたことがあり〔春日2000・2001〕、これと一部重複するが、以下では、新津丘陵周辺と西川・矢川周辺では土器様相が異なることを示し（註7）、古墳時代以来の伝統的な政治的関係が9世紀前半～末の土器様相にも影響を与えていた可能性を示したい。

A 食 膳 具

食膳具の須恵器・土師器・黒色土器の構成比率について検討し、必要に応じ須恵器の産地にも触れる。土器の計測法は特に断らない限り口縁部残存率計測法による。

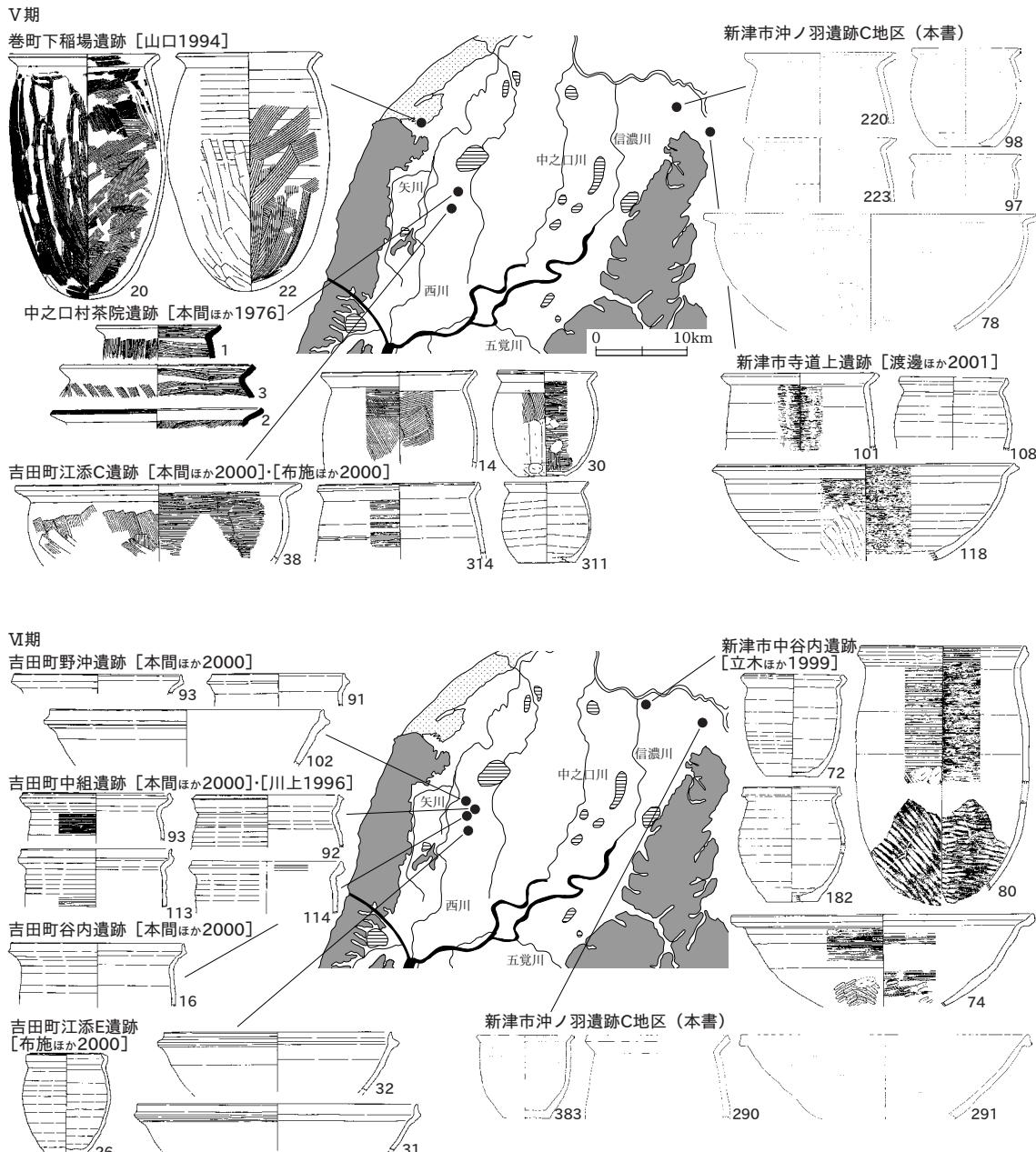
西川流域の吉田町江添C遺跡32・34トレンチ（V2期）では食膳具の90%以上を須恵器が占め、75%前後はB群である〔春日2000〕。

一方、新津丘陵周辺の中谷内遺跡SK14（V2期）は土師器が10%、SX28・29・30（V2期）は土師器が41%を占める〔立木1999〕。沖ノ羽遺跡7下SK134・8下SK43（ともにV1期）は、80～90%前



第30図 食膳具の構成比率

3 西川流域の古代土器様相との比較



第31図 各遺跡出土の煮炊具

後を須恵器が占め、須恵器の80%前後はA群である。8下SK43・8下SK36（ともにV2期）では、土師器が30%前後確認でき、さらに新津丘陵に近い寺道上遺跡SK3（V2期）では土師器が90%以上を占める。V1期の様相は不明だが、V2期の西川流域は、新津丘陵周辺に比べ土師器が少く須恵器B群が多い傾向がみられる。

こうした様相はVI1期までは続くと思われる。西川流域の吉田町高木B遺跡（VI1期）は須恵器が59%、土師器が41%であり、須恵器の大半はB群である〔春日2000〕。一方新津丘陵周辺の沖ノ羽遺跡8下SE27（VI1期）は須恵器1%、土師器73%、黒色土器24%、細池遺跡SK3（VI1期）は須恵器2%、土師器97%、黒色土器1%であり〔立木1998〕、西川流域に比べ新津丘陵周辺は土師器の比率が高い。

こうした状況はVI2期には解消される可能性が高く、中組遺跡（VI2期）〔川上1996・本間ほか2000・春日2000〕、沖ノ羽遺跡SK100ではとともに土師器が80%強を占める。

B 煮 炊 具

煮炊具の口縁部形態・調整について検討する。V期の煮炊具をみると、西川流域の巻町下稻場遺跡20〔山口1994〕、中之口村茶院遺跡1～3〔本間ほか1976〕、吉田町江添C遺跡14・30・38〔本間ほか2000、布施ほか2000〕など、口縁部端部に面を持ち体部にハケメ成形を行ういわゆる「西古志型釜」が多く見られ、ロクロナデ・カキメ・叩きなど須恵器の成形技法を用いる小釜・長釜・鍋は確認できないわけではないが比較的少ない。一方、新津丘陵周辺では、ロクロナデ・カキメを多用する煮炊具が主体を占め「西古志型釜」は確認できないわけではないが（沖ノ羽遺跡C地区74など）、存在しても僅かである（第31図上段）。

VI期には、西川流域でもロクロやカキメなどの須恵器技法を用いる煮炊具が一般的になるが、吉田町の沖遺跡91・93・102〔本間ほか2000〕、同町中組遺跡93・113〔川上1996、本間ほか2000〕、同町谷内遺跡20〔本間ほか2000〕、同町江添E遺跡26・31・32〔本間ほか2000、布施ほか2000〕など口縁端部が上方に長く屈曲するものが多く確認できる。一方新津丘陵周辺ではこのような例は少ない。

以上のように西川流域と新津丘陵周辺はV・VI期の食膳具・煮炊具に差が見られた。このことが、古墳時代以来の伝統的な政治的関係によるかは、①政治的な関係がどのような経緯で土器様相に反映されるのか。②古墳時代前期～8世紀の間も土器様相に差が見られるのか（註8）、などの問題を明らかにしなければならない。今後の課題としている。

註

- 1) 8上SD1、8上SE23・24、8上SK1ともI～II期にかけての珠洲すり鉢が出土している。
- 2) このほか北野博司らは、①口縁部で水挽き痕が抜ける方向、②変形に伴う小ジワや縮れジワの傾斜、③体部のロクロ目の傾斜などを水挽きのロクロ回転方向を判断する観察項目として挙げている〔北野ほか2002〕
- 3) 須恵器B群（小泊産）のロクロ回転方向に関しては、渡邊〔2001〕、川村〔2002〕、春日〔2003〕を参照していただきたい。
- 4) 作り手が回転しながら叩き成形を行う可能性も考えられるが、特大の甕以外は回転台に載せるほうが合理的と考える。
- 5) 叩き成形の須恵器の回転方向が利き手と関連すると考えるならば、経験的に知る左利きの人の比率に比べ、左回転の須恵器の比率が高すぎるようと思える。
- 6) 黒色土器の大半のものが、口縁部外面にヘラミガキを行う。このことは、黒化が口縁部外面まで及ぶことを想定していたとも考えられる。
- 7) 西川流域と新津丘陵を結ぶ信濃川河口周辺や亀田砂丘周辺の様相については資料数が定量存在するにもかかわらず力量不足から検討できなかった。信濃川河口周辺は西川流域に近い土器様相、亀田砂丘周辺は沼垂郡に近い土器様相と考えている。別の機会に検討したい。
- 8) 古墳時代前期（後半）は小型精製器種の形態、8世紀は須恵器技法を用いた煮炊具の普及度合などが異なる可能性が高いと考えているが資料数が少ない。資料の増加を待って検討したい。